

倉持守三郎先生



第 21 回 長島猛人

倉持監督は歴代監督の中でも勤続年数が最も長く、その間に日本サッカー界も東京オリンピックを経験し、そのため、全国にサッカーが知られ、底辺も広がった。それにつれてサッカーの戦術、システム等多くの要素がめまぐるしく変化した時期であった。埼玉に於いても、サッカー王国の牙城はゆるがず、この 15 年の間に埼玉から全国高校選手権 5 回、インターハイ 3 回、国体 6 回の優勝校を出している。倉持後期に成ると、サッカーの底辺が広がり、部員も増加したが、レギュラー、イレギュラーの差、あるいは部活に対する考え方の変化の中ではじめて倉持イズムが醸成した時期であった。歴史の流れには多かれ少なかれの浮沈があり、それぞれの波の中で全国優勝のタイトルを得るといった経験に、勝るとも劣らない質的な経験を積んだのである。倉持イズムとはここに焦点がしぼれるのではないかと思われる。

倉持体制は三期に分けられる。一期は東京オリンピックから埼玉国体にかけてのサッカー熱の高揚までに形作られる前代のおいの強い時代。

二期は東京オリンピックから埼玉国体

によって日本サッカー界あるいは埼玉サッカー界が最高潮に達し、レフリー倉持氏としての全盛期を迎える時期である。しかし一方では浦高にとって、受験、新設校ブームを迎える低迷期でもあった。

三期は、少年サッカー団の浸透により、数人単位で高レベル入学者を受け入れ、ある程度の戦績を得るまでに復活した時期である。

それぞれの期の詳しい内容は、それぞれの代の筆にまかせるとして、ここでは全期に亘る倉持氏のチーム作りと運営を、教えられた立場を通して、三点に分けて分析しようと思う。

まず倉持先生は母校東京教育大の流れから多くの高校と定期戦を組み、また遠征にも出掛けた。クラマー氏を招聘したり、大学とも試合を組み、質、量ともに対外的な刺激を与えてくれた。現在でこそ、各種サッカーフェスティバルで日本各地のチームとの交流もでき、さらに一年中何かの大会の予選をやっているというそがしい年間スケジュールであるが、当時に於いてすでに浦高は他校とは比べられないほどめぐまれた条件にあったといえる。

このような好条件は倉持監督時代はほとんど途切れることなくつづくが、一つの意味としては、システム的な戦術の模索があったのではないか、と思われる。試合ごとにポジションをかえられたり、システムが変わったり、相手に合わせた研究態度が明白に選手の側からもうかがわれた。もちろん倉持氏は誰も知るよう

に軽々に言を発する人ではないため選手同士の共通理解は、日本人的発想で行われ、そのため疑心悪鬼もかなりあったことは否めない。

第二に倉持監督の方針として、徹底的に部員の自主性を尊重し、団体練習とセルフトレーニングの区別を明確にしたということである。セルフトレーニングはいつの時代でも行われていたが、それは団体練習以外の時間行う従来や現在のもと同様なものであった。ここでは、団体練習の代わりに行うものとして、団体練習と同じレベルとした。つまり団体練習は週三回ぐらいで、他は自分でプレーをみがくという方式である。たしかに理想的ではあるが、いくら能力が高いとはいえ、所詮子供は集団であっても個人であっても楽な環境を求めるものである。集団スポーツの安定向上はある程度の強制力が必要であり、自由と自主もその中に含まれるという論理的納得はまだできない年代であった。しかしその精神は現在でも形をかえて引きつがれ、早朝グラウンド全面での団体練習を週二回行う時もある。

第三に、浦高生の将来という観点からすべて考え、あくまでもサッカーを教育の一環とし、試合に出場しない部員に常に気をつかい、練習も巧拙のへだてなく混合で行わせた。その結果、少年団あがりの部員からは反発を受けることもあったようだが、半分ほどいる初心者の技術は他校と比較にならないほど向上することになった。この考え方は歴代の主将に

も受けつがれ、すべての部員が浦高サッカー部という看板を背負うという意識の醸成には成功した。

全体として、サッカー、さらにはスポーツ自体の意識が急激に変動する時代にあって、浦高独自の道を正確にピックアップされたという業績は、後百年の流れを見すえた重大なものだったと思われる。最近では部員が70名前後存在し、「サッカーも人生の一つさ」という冷めた考え方も浸透する中で、今後も確実に変化を余儀なくされるスポーツ界においては、一つの鏡となる仕事をされたといえる。

倉持監督・柴田コーチのエピソード

倉持監督の思い出として先ず上がったのは、当時先生が乗られていた観音開きの車のことである。すでに映画でしか見ることのできない車とあってこの車に乗せてもらえることはほとんどの部員が願っていた。ある時浦和西高からの帰り道にこの幸運を手にした4名ほどが勇んで車に乗り込み西高坂にさしかかったとたんエンジンが止まり、結局西高坂を押し上げて上がったというエピソードがある。浦和高校選手時代に全国大会決勝戦において口笛を吹きながら敵を抜き去り、浦高を何度も全国優勝に導いた伝説のスーパープレイヤーであるのだが、当時の部員は親しみを持って当時の先生を語っている。後談だが、当時の部員達も先生がかなり酒が好きであるということを知っていたが、卒業後再会し酒の席でそちらの方でもスーパースターであることを認識させられた。